

[木は激しく動き、森も少しずつ動いている…] [迫り来る法改正と時代変化の荒波-42]

<序文> 買い物がてら、偶に近所の商店街やアーケード街を歩いてみると、あった筈のそば屋やラーメン店、花屋などがいつの間にか姿を消し、シャッターが下りたままだったり、スマホショップやATMコーナー、100均店等に衣替えしてしまったりしている光景にその都度出くわし、面食らう事があります。

源平の昔から栄枯盛衰は世の習いであり、特に珍しい出来事ではないのかもしれませんが、需給関係の変動や後継者難、デフレの長期化による消費抑制、それに伴う売り上げ減少&相対的なコストアップ等、たとえ個々の原因が一様ではなかったとしても、目の当たりにする現実社会の様相は、瞬く間に車窓から飛び去る景色の様に変化が激しく、**各事業者のビジネスモデルの定義付けに手間取っている間に、その事業自体が雲散霧消してしまうケースもある程**です。

現象面の変化が著しいと、どうしてもそれに目を奪われ、本質を見誤ってしまいがちですが、意外にも「木ばかり見ずに森を見る」「視点を変えて見る」「焦点距離を変える」=身の回りで起きている個別の事柄とマクロの事象の有機的關係を、例えば統計数値を通して探る等=の、ごく当たり前の、オーソドックスなアプローチが、核心を突く場合もあります。そうした事例に倣い、今回、基本資料に用いる事としたのは、「人口推計」(総務省)と国交省編纂の「国土のグランドデザイン 2050/副題-対流促進型国土の形成-」(以下「GD2050」と表示)です。様々な店舗の生成・発展・消滅の過程が「木」だとすれば、国家経済を左右する程の大きな影響力を有する要因の一つが人口問題であり、その「増減を地域単位で見たものが(自然増+流入増)-(自然減+流出減)」、「国レベルで捉えたものが社会増減=日本人の減少+外国人の増加=(-2,000)+(136,000)=134,000[28年国勢調査]」であり、「森」も少しずつ動いている、という事が良く実感できるのです。確かに「日本人自体は自然増<自然減」ですが、外国人は流入増>流出減。その結果、僅かながらではあっても、全体として人口は増加しており、メディアの論調とはやや異なる様相を呈しています。

一方、**人口の推移や絶対値そのものではなく、これを市場ベース=需給関係=で見ようという場合に参考になるのが「GD2050」**。私見に過ぎませんが、恐らく各業界の大手事業者は、ここに示されたデータを基に出店計画等の基本構想を練り、個別のマーケティングを経て、実行の可否を決定しているのではないかと思わせる資料であり、概要は、次のようなものです。

「…存在確率50%及び80%という概念を使い、各業種のサービス拠点存否の人口規模を、蓄積された統計データから導き出す事を目的に考案された計算法。」例えば、スタバの存在確率50%は175000人と弾かれているのですが、どう解釈すれば良いのでしょうか?本文で、その辺りを追求して見たいと思います。